山陰に息づく「一式飾り」の習俗（５）
―島根県奥出雲町を事例として―

高橋 健司

Folkways of “Isshiki-kazari” in the San-in Region (5)
：A Case Study of Okuizumo-cho, Shimane Prefecture

TAKAHASHI Kenji

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第20巻　第2号　抜刷
REGIONAL STUDIES（TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES）Vol. 20 / No. 2
令和５年12月22日発行　　December 22, 2023

山陰に息づく「一式飾り」の習俗（５）

― 島根県奥出雲町を事例として ―

高橋健司*

Folkways of "Isshiki-kazari" in the San-in Region (5)
: A Case Study of Okuizumo-cho, Shimane Prefecture

TAKAHASHI Kenji*

キーワード:「一式飾り」,「俄（にわか)」,「風流(ふりゅう)」,『野生の思考』, ブリコラージュ，暮らしの技法，「野」の芸術，ヴァナキュラー・アート
Key Words : “Isshiki-kazari”, “Niwaka”, “Furyuu”, *La Pensée sauvage*, Bricolage, Art de Vivre, Vernacular Art

Ⅰ.「一式飾り」が伝わる島根県奥出雲町

「一式飾り」とは，山陰の六つの地域（鳥取県の南部町法勝寺地区，島根県の出雲市平田町，出雲市斐川町直江地区，雲南市掛合町，奥出雲町横田・大市地区，奥出雲町下横田・古市地区）の４月から８月にかけて開催される祭りにおいて，住民が町内ごとに陶器一式，漆器一式といった同じ種類の生活道具だけを用いて制作した作品を飾る年中行事であり，それは地域で世代を超えて受け継がれ，暮らしの中に息づく習俗である[1]。

このうち，島根県東部の山間部に位置する奥出雲町は，2005 年に仁多町と横田町が合併して誕生し，旧横田町役場があった横田・大市地区と，その南に位置する下横田・古市地区で，それぞれ「一式飾り」の行事が行われている。

合併前の 2004 年に横田町文化協会が刊行した『横田歴史文化写真帖』によれば，旧横田町は長い歴史を誇り「戦国時代の三沢一族支配の藤ケ瀬城と城下町，牛馬市や市場の繁栄，江戸末期の算盤産業に始まり，算盤は明治・大正・昭和初期にかけて生産量はピークに達し，流通過程による全国各地からの情報の流入，鉄道の開通，更には山間地としては早くからの教育機関の創設と充実による市域文化の発展」を遂げたとする[2]。

これに関し，横田・大市地区でも下横田・古市地区でも，かつては牛馬市が盛んに行われていたと住民が記憶し，また算盤という地場産業が地域経済を支えて，街には商店や宿屋が立ち並び，以前は人や物資の往来が活発であった。

このような市場町として栄えた二つの地区において「一式飾り」の行事が長年続けられてきたが，奥出雲町の「一式飾り」は島根県内でも知名度が低く，横田・大市地区の住民でさえ近隣の下横田・古市地区の「一式飾り」を知らないのが現状である。また，後述するように大市と古市では「一式飾り」が始まった年代が異なり，地区間の交流も見られないため，本稿では二つの地区の「一式飾り」を，個別に取り上げることにする。

Ⅱ．横田・大市地区の「一式飾り」

まず，横田・大市地区の「一式飾り」について見ると，大市の「一式飾り」は毎年７月中旬に開催される「大市夏まつり」で飾られている。「大市夏まつり」とは，愛宕権現祭と恵比寿祭りを合体させた祭りで，地域の古老によれば，かつては恵比寿祭りの出し物として「一式飾り」が飾られていたとのことである。

これについて，前掲の『横田歴史文化写真帖』では戦後間もない昭和 20 年代初めの大市の恵比寿祭りが写真で紹介され,「今日は一式飾りで知られる恵比寿祭り。当時は，神輿の練り歩きと，なんと言っても楽しみにされていたのが嗜好を凝らしたにわかであった。医者に扮するなど，今年はどんな出し物であろうかと楽しみにしたものであった」(吉田保禅氏提供）と記されている[3]。

この昭和 20 年代に行われていた「にわか」とは，恵比寿祭りで住民が仮装して町を練り歩く行列を指

＊鳥取大学地域学部地域学科

し，当時は仮装行列が祭りの出し物として人気を博したが，やがて祭りの出し物は仮装行列から「一式飾り」へと交代する。

大市の「一式飾り」の始まりについて，大市自治会の大市上組（常会）の古老に話を伺ったところ，「戦後に平田から人を招いて制作の指導をしてもらって始まった」と話され，実際に「昭和 25 年 大市で初の一式飾り」と記された図１の大市上組の「恵比寿鯛」の写真が発見された。これを見ると，鯛は漆器の椀や箸で作られ，また陶器の皿を波に見立てるなど，食器一式を巧みに用いている。そして作品の背後には屏風が置かれ，民家の座敷を上手く仕切って飾っている。このように大市では「一式飾り」が戦後の 1950 年に始まり，雲南市掛合町の「掛合一式飾り」と同様，先進地である出雲市平田町の「平田一式飾り」を手本として[4]，「一式飾り」が飾られるようになったと言える。

その後，「一式飾り」は大市自治会の各常会で制作されるようになり，各常会が祭りで競って毎年新たな作品を飾っていたが，近年は人口減少によって次第に参加する常会が減り，コロナ流行前は七つの常会が各１点の作品を飾る状況であった。

このうち，大市下組（常会）について見ると，図２の「虫の合奏」が記録に残る同組の最も古い作品である。これは 1961 年に竹製品一式で作った作品で，４匹の昆虫が楽器を演奏する場面を表現している。図１の「恵比寿鯛」と比べると即興的で素朴な印象を受け，竹製品一式の作品が多い鳥取県南部町の「法勝寺一式飾り」に似ている。

それが昭和末期になると，大市下組は図３の「北前船」や図４の「おろち」のような算盤一式の作品を飾るようになり，作品が大型化している。その理由として，大市下組には算盤を扱う商店があり，多種多様な算盤が入手できたことが挙げられる。算盤は長方形であるため，作品に用いるのが困難に思えるが，「北前船」は算盤の玉を連ねて，膨らんだ帆を上手く表現し，また「おろち」はプラスチック製のカラフルな算盤を龍の目や口や舌に用いて，作品のアクセントにしている。

こうした算盤一式を用いた作品の制作は，平成時代になっても続けられ，大市下組は 2014 年に図５の「大遷宮とご婚約」を飾った。これは筆者が初めて大市を訪れた際に目にした作品で，同年は出雲大社の大遷宮が完了したことに加え，出雲大社の神職と皇族の婚約も発表され，それらを祝して算盤一式で出雲大社を飾っている。作品を見ると，出雲大社は緩やかにカーブした大屋根や地面の玉砂利まで算盤で巧みに表現され，作品に趣向が凝らされている。

これに続いて，大市下組は算盤一式で 2015 年に図６の「たたら・棚田」，2016 年に図７の「トロッコ列車」を飾った。どちらの作品も奥出雲の風景を算盤一式で表現し，奥行きのあるジオラマ風に仕上げて観客の目を楽しませている。

さらに，2017 年からは算盤一式で「干支シリーズ」の作品を飾り，酉年の 2017 年は図８の「おなが鶏」，戌年の 2018 年は図９の「平昌の思い出」，猪年の 2019 年は図 10 の「猪突猛進」を飾った。このうち，「平昌の思い出」は，2018 年に開催された平昌オリンピックに因んだ作品で，フィギュアスケートで金メダルを取って話題になったロシアのザギトワ選手と，ザギトワ選手に贈られた秋田犬のマサルを算盤で見立てて，干支に加えて時事的な話題も作品に織り込んでいる。

以上のように，大市下組では昭和時代から算盤一式を使い続けて話題性のある作品を飾ってきたが，同じ材料を用いて建物や乗り物から生き物まで表現

図１　大市上組の「恵比寿鯛」
（1950 年撮影　奥出雲町教育委員会提供）

図２　大市下組の「虫の合奏」
（1961 年撮影　奥出雲町教育委員会提供）

図３「北前船」（1986 年撮影 奥出雲町教育委員会提供）

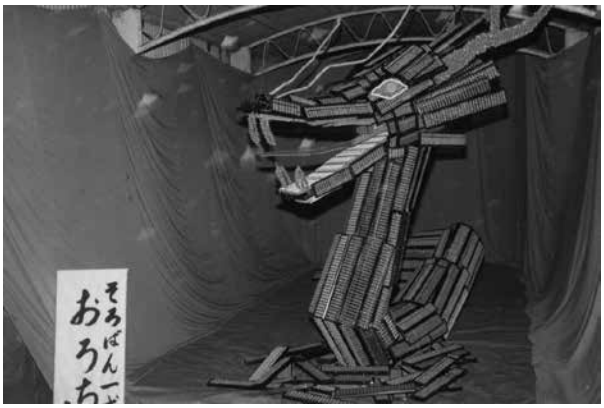

図４「おろち」（1987 年撮影 奥出雲町教育委員会提供）

図５「大遷宮とご婚約」（2014 年 筆者撮影）

図６「たたら・棚田」（2015 年 筆者撮影）

図７「トロッコ列車」（2016 年 筆者撮影）

図８「おなが鶏」（2017 年 筆者撮影）

図９「平昌の思い出」（2018 年 筆者撮影）

図 10「猪突猛進」（2019 年 筆者撮影）

の幅が広い。それは他の常会でも同様で，殿町上組（常会）は竹製品一式を毎年使い続けて干支に因んだ動物の作品を飾り，大市上組は陶器一式，大市中組（常会）は金物一式と，どの常会も同じ材料を用い続けているにもかかわらず，毎年新たな趣向が作品に凝らされて見飽きない。

こうして大市では多彩な作品を 70 年に渡って飾り続け，観客の目を楽しませてきたが，コロナ禍の影響で 2020 年より「一式飾り」は休止されている。

Ⅲ．下横田・古市地区の「一式飾り」

次に，下横田・古市地区の「一式飾り」について見ると，古市の「一式飾り」は毎年７月下旬の土曜日に開催される古市愛宕祭りで飾られている。古市では「一式飾り」が飾られる期間が短く，作品は土曜日の昼過ぎから夜までの半日しか飾られず，日曜日の朝には解体される。また，地区外に向けて宣伝しないため，近隣でも知る人は少ない。

これに関し，前掲の『横田歴史文化写真帖』では古市愛宕祭りも紹介され，1968 年の「通りを練り歩く山車と,勢いよく練り歩く神輿すがた」の写真と，同年の「明治百年記念」と題した「通りもの」（仮装行列）の写真が掲載されて「古市の愛宕祭りは今日質素になっているが，当時は古市の愛宕祭りは，屋台あり，通りものありと賑やかであった」（安部共一氏提供）と記される一方,「一式飾り」は取り上げられていない[5]。

筆者も古市で「一式飾り」の行事が行われていることを長い間知らなかったが,大市を訪れた際に「下横田でも横田を真似て『一式飾り』を飾っているらしい」という声を耳にし，2018 年に初めて古市へ調査に訪れ，古市愛宕祭りで飾られた７点の作品を確認した。その内訳は，古市自治会に属する常会の小当屋（祭り当番）による作品が６点，麻雀同好会による作品が１点である。大市と同様に竹製品一式や陶器一式の作品はあったが，算盤一式の作品は見られず[6]，反対に麻雀牌一式の作品を初めて目にした。

また，竹製品一式で「とんぼ」を飾った仲町（常会）には，新宮神社の宮司を務める古澤宏矩氏（昭和 19 年生）が保管する「愛宕祭役割及算用帳」と題した記録が伝わり，この記録についても調査した。そこには 1888（明治 21）年から戦前にかけての古市愛宕祭りに関する取り決めや役割分担が記され，かつての古市愛宕祭りは旧暦で行われて，現在より１カ月遅い８月に開催されている[7]。

このうち，1891（明治 24）年の記録には古澤氏の祖父の名が仲町の「飾物方」として記され，1906（明治 39）年の記録にも「飾物方」として 12 名の名前と「愛宕山飾」として２名の名前が記されている。果たして「飾物」が「一式飾り」と同じかどうかは不明だが，山車の飾り担当と推定される「山飾」よりも「飾物」の担当者の人数が多く，明治時代末期には「飾物」の人気が高かったことが窺える。

さらに，1940（昭和 15）年の記録には「各区一ヶ所以上ノ飾物ヲナスコト 飾物ハ審査ノ上優秀ト認メタルモノニ賞金ヲ交付ス 飾物ハ当日午後三時迄ニ出陳ヲ終ルヲ要ス 賞金ハ一等参円壱点 二等弐円弐点 三等一円参点 計拾円トス 審査員ハ各小当屋ヨリ二名宛 当日午後三時ヲ記シ大当屋ニ集合スルコト」と記され,「飾物」の審査が行われて１等から３等までの６作品に賞金が交付されている。

こうした記録から，古市では明治時代から愛宕祭りで「飾物」を飾り続け，昭和時代は日中戦争下でも「飾物」に賞金が交付されるほど，作品コンクールが盛んであったと言える。その賞金の出所は不明だが，他の地域のように商家の旦那衆や商工会などの支援があったと考えられる。

その頃の状況について，仲町の古澤幸久氏（大正

図 11「天に昇る龍」（2019 年 筆者撮影）

図 12 下から見上げた「天に昇る龍」（2019 年 筆者撮影）

12 年生）に話を伺ったところ，「幼い頃に『一式飾り』を見た記憶があり，これまでに見た作品の中では塗り物（漆器）一式で作った『朝顔に釣瓶取られてもらい水』という作品が印象深い」と話された。また仲町の古澤宏矩氏も「子どもの頃は一つの当屋で作品を二つ出すところもあった」と話され，戦前から戦後にかけて古市の「一式飾り」が盛況であった様子が窺える。

残念ながら古市の「一式飾り」の始まりについては不明だが，古市の「一式飾り」は大市で飾るようになる以前から飾っていたと考えられ，大市を真似て始めたとは言えない。その開始時期は，江戸時代後期に始まったとされる「平田一式飾り」や，江戸時代末か明治時代初期の開始とされる「法勝寺一式飾り」のように，前近代まで遡る可能性もあり，今後の新たな資料の発見を期したい。

一方，戦前の古市で盛んに行われていた作品コンクールは現在でも行われ，2019 年は実際に作品を審査する様子が見られた。審査員に話を伺うと，審査を担当するのは祭りで作品を飾った常会の６軒(人)の小当屋で，自らの作品以外の作品に点数を付け，合計点で順位を付けるとのことである[8]。

その審査で第２位に選ばれた作品が，図 11 の上・本町小当屋による「天に昇る龍」である。これは上町と本町の二つの常会が合同で飾った作品で，前年と同様に陶器一式を用い，人気のあったテレビ番組「日本むかし話」のオープニングで背中に子どもを乗せた龍が天に昇る場面を表現している。また，この作品は民家の座敷に飾られ，作品タイトルの横には「前に出て，しゃがんで天を見上げて下さい！」との注意書きがあり，指示に従い作品を下から見上げると図 12 のように見え,そこには陶器でできた巨大な龍と白い雲が針金で天井の梁から吊り下げられている。よく見ると，龍の口の中には噴水の仕掛けがあり，作品の大きさのみならず奇抜なアイデアにも驚く。ちょうど筆者が作品を眺めていた時に，元町（常会）の住民が見学に訪れ,「これぞ一式飾り！」と称賛の声を上げた。制作者に話を伺うと，仕事で担当できなくなった小当屋に代わり，３人で７日かけて飾り，最後は１人で夜中まで作業して完成させたとのことで，制作中は「どこにどの陶器を用いるのか考えるのが楽しかった」と話され，作品作りに夢中になったようである。

そして，2019 年の審査で第１位（愛宕賞）に選ばれた作品が,図 13 の元町小当屋による「出雲横田駅」である。元町も前年と同様に陶器一式を用い，前年の作品（「世界遺産　大浦天主堂」）に続いて愛宕賞を受賞している。「出雲横田駅」は実際に駅に飾られている出雲大社と同形の注連縄に特色があり，それを陶器の花入れやビールジョッキを用いて表現し，駅前にある出雲神話の稲田姫の像も，御神酒を入れる瓶子やレンゲで巧みに見立てている。制作者に話を伺うと，作品を飾る会場の設営に２日かかったが，作品の制作の際は７人から 10 人が集まり，わずか１日で仕上げたとのことで，多人数による共同作業が短期集中で行われている。

ほかにも 2019 年は４点の作品が飾られ,このうち仲町小当屋と中山通小当屋は竹製品一式を用いて作品を制作し，仲町の「カマキリ」は審査で第３位に選ばれている。仲町と中山通の二つの常会は，前年も竹製品を使用しており，古市でも同じ材料を用い続ける傾向が見られる。

翌 2020 年からは古市でもコロナ禍で「一式飾り」が休止されたが，2023 年に祭りが再開されて「一式飾り」の展示は各常会の判断に委ねられた。これに対し，上・本町と元町は自主的に作品を飾ることを決め，元町は４年ぶりに陶器一式を用いて図 14 の「トロッコ列車ラスト・ラン」を飾った。この作品

図 13「出雲横田駅」（2019 年　筆者撮影）

図 14「トロッコ列車ラスト・ラン」（2023 年　筆者撮影）

は，島根と広島を結ぶ木次線を走るトロッコ列車の「おろち号」が2023年に廃止となることを惜しみ，トロッコ列車が鉄橋を渡る風景を表現している。よく見ると，先頭のディーゼル車には箸置きを並べてオロチに見立てたエンブレムが付けられ，その横に置かれた愛宕賞のトロフィーが，昭和時代から元町が作品コンクールで何度も優勝した歴史を物語っている。また，上・本町も同様に陶器一式を用いて「ありがとう!!奥出雲おろち号」を飾ったほか，麻雀同好会も５年ぶりに麻雀牌一式の作品を飾り，祭りに彩りを添えている。

このように古市ではコロナ禍による「一式飾り」の休止に終止符を打って，祭りで作品を自主的に飾るようになり，ようやくコロナ前の暮らしに戻った観がある。

Ⅳ.「野」の芸術としての「一式飾り」

島根県では出雲市の「平田一式飾り」と「直江一式飾り」，雲南市の「掛合一式飾り」が神への奉納物と認識されているのに対し，奥出雲町の大市と古市の「一式飾り」は，祭りに彩りを添える出し物と認識されている，

その出し物を大市では「にわか」と呼んだが，「俄（にわか）」を研究する佐藤恵理によれば，「俄」には「仮装，歌・踊り，寸劇，造り物，さらに行進ないし練り」と多様な形態があり，祭りで飾る「造り物」を「俄」と呼ぶ地域もある[9]。

また佐藤は「近世の流行の中心地」であった大阪に注目し，「近世において，祭りの下にある俄という言葉は，出しもの，ないし見せることを前提とした表現行動を作る趣向・思い付きと同義でなかったか」と指摘し[10]，「珍しき趣向」や「思ひ付の珍しきこと」という「意表をついた新鮮な機知になる企て」が「造り物風流」であるとする[11]。

これに関し，山陰の「一式飾り」のルーツは，近世後期に上方の祭りで流行した「造り物」にあるとされ，大阪で出版され人気を博した絵本『造物趣向種（つくりものしゅこうのたね）』を介して「造り物」が山陰に伝わったとされる[12]。この『造物趣向種』は鳥取県南部町に現存し，そこに描かれた作品の絵を手本にして，住民が「法勝寺一式飾り」に趣向を凝らし，観客の目を楽しませてきた[13]。

こうした祭りで飾る造形作品に趣向を凝らして人目を驚かす「風流（ふりゅう）」の精神は，山陰各地の「一式飾り」に通底し，奥出雲町でも地域の住民が身近にある道具を見立てて趣向を凝らし，「一式飾り」の造形に情熱を傾けている。

以上のように，山陰の「一式飾り」は近世の「造り物風流」の伝統を受け継ぎ，今も地域の祭りで飾る作品を創作し続けている。それはプロの芸術家ではないアマチュアの住民が日常生活の中で造形表現を楽しむ行為であり，地域の暮らしに根ざした「野」の芸術と言えよう。

ところが，これまで民俗学では「一式飾り」のような芸術が注目されることは少なかった。その理由について民俗学者の小松和彦は「民俗学においては，社会伝承や経済伝承，儀礼・信仰伝承の方に研究の比重が置かれ，『芸術』や『娯楽』は周辺的な民俗，すなわち資料として余力があればとりあえず採集するが，それに焦点を合わせた研究は魅力のないものとして位置づけられてきた」と指摘する[14]。

これに対し，民俗学者の俵木悟は，祭りで多様な造形を生み出してきた「人びとの祭礼にかける心意」に注目する必要を訴え，「そもそも祭礼の作り物や練り物などの風流は，毎回趣向を凝らして作り替えられるところに特色があった。ときには因習を打破するような突飛なものが現れることもあったろうし，逆に人気を集めた趣向が流行して，瞬く間に周辺に広まることもあったろう。変化することが常であると考えられた風流の様式は，時々の流行現象や，人びとの顕示欲や想像力によってヘテロに増殖していく力があるように思われる」と述べ，「身近にあるさまざまな要素を取り込み，異種のものを接合して新しいものを作り，時代に合わせ，人の嗜好に合わせてそれを改変していくという創造行為」は「取り組むべき価値のある研究対象」とする[15]。

そして，俵木が指摘する「作り物」の「風流」という「創造行為」は，フランスの文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースが『野生の思考』の中で取り上げたブリコラージュに通じる。フランス語のブリコラージュは，日曜大工的な意味を込めて「器用仕事」と訳されるが，レヴィ＝ストロースはフランス人が日常生活の中で身の回りにあるものを組み合わせて創作する行為をブリコラージュとし，またブリコラージュを行う人をブリコルールとして，ブリコルールは「くろうととはちがって，ありあわせの道具材料を用いて自分の手でものを作る人」であり，「限られた道具と材料の集合で何とかする」，「適当な材料が見あたらぬところへ他の要素を転用する」，「限られた可能性の中で選択を行うことによって，作者の性格と人生を語る」と記し，暮らしに根ざした造形表現に注目する[16]。

フランスにはブリコラージュのほかにもアール・ド・ヴィーヴル（Art de Vivre）という言葉があり，

芸術（Art）は生活（Vivre）に役立つ「暮らしの技法」や「生きる知恵」と訳されるが，哲学者の鷲田清一は，日本では「芸術は日常生活を営む上でのさまざまな工夫と直結し，また社会生活に強くコミットしてゆく活動なのに，そのことが過少に評価されてきた」とし，ブリコラージュを基本とする芸術は「何ごとにつけ行政にお委せするのではなく，流通などのサービスを購入するのでもなく，自前で，協働をつうじて，既存の装備をリフォームしながら，したたかに生き延びてゆくその技（アート），つまりはマニュアルを前提としない問題解決の技法（アート）」と述べ，ブリコラージュを高く評価する[17]。

これまで山陰各地で「一式飾り」の制作に何度も立ち会ってきた筆者の目には，「一式飾り」を創作する住民の姿が，ブリコラージュを行うブリコルールの姿と重なって見える。趣向すなわち創意工夫を旨とする「一式飾り」は，「限られた道具と材料の集合で何とかする」という「暮らしの技法」そのものであり，それは近世から続く庶民の「生きる知恵」にほかならない。

一方，近年は民俗学でも，ヴァナキュラーという新たな視点から芸術に焦点を当てるようになった。民俗・文化人類学者の小長谷英代によれば，英語圏で学術的に用いられるようになったヴァナキュラーは「主に『言語』と『土着性』に特徴づけられ，日本語では名詞・形容詞として『土地言葉』『地方語』『土地特有』等の言葉で訳される。しかし今日の文脈に語られる『ヴァナキュラー』の意味には，それら訳語では捉え難い新たな意味が含まれ」，「権力，近代，人種，階級から，個人や集団の創造性」などの多様なテーマが関わって「文化研究の関心を捉えている」とする[18]。

また，民俗学者の菅豊は「ヴァナキュラー文化研究の輪郭線」と題した現代民俗学会研究会を開催し，「未だに vernacular という語に対する日本語での定訳はない。私があえてその語を翻訳するならば，『野』に生きるという意味での『野生』，あるいは『野性』と訳すであろう」として，「野生の学問」である民俗学で「野生の文化」を研究する意義を唱えた[19]。さらに菅はヴァナキュラー・アートを新たな研究対象とし，それを「野の芸術」と翻訳して，民俗学の視点から芸術を捉え直そうとしている[20]。

これに関し，民俗学者の加藤幸治は「民俗学におけるヴァナキュラーアートの研究では，それを創り出す人々の非専門性や，行為の日常性に着目する。民具や民藝，フォークアートといったことばにまとわりつく『昔ながらの』『伝統的な』というイメージから離脱し，わたしたちが今日もここで生きているという日常生活の現実をも含み得る，現在進行形の暮らしの造形や表現を射程にとらえる」とし，「ヴァナキュラーアートは，特異な表現への表面的な着目から，社会のどこにでもいる『わたくし』を含むふつうの人々が行う日常生活の実践と造形表現の研究へ向かいつつある」と指摘する[21]。

筆者はヴァナキュラーという言葉を知る以前から，地域の住民が日常生活の中で毎年新たな「一式飾り」の作品を創り出す姿に魅せられ，「一式飾り」を研究対象としてきたが，「一式飾り」の創作はまさに「個人や集団の創造性」の発現であり，その創造的な造形表現はヴァナキュラー・アートと呼ぶにふさわしいと言えよう。

しかし，地域の暮らしに根ざした生活文化は，グローバリズムの影響を受け，今や存続の危機に瀕している。クリエィティブ・リユースを提唱して廃材を再利用した芸術活動を地域で実践する大月ヒロ子も「大量生産・大量廃棄は環境を破壊するだけではなく，私たちの暮らしの中にあった文化も消し去ろうとしている」と警鐘を鳴らす[22]。

このような厳しい状況の中で，山陰の六つの地域では「一式飾り」という協働的な芸術活動が自前で続けられている。山陰の「一式飾り」は，地域に暮らす普通の人々が創造力と想像力を発揮して，身近にある日用品一式を巧みに見立てて造形し，自らの手で日常の暮らしに彩りを添える営みであり，それこそが「野」の芸術としての「一式飾り」の魅力や価値ではないだろうか。

謝辞

フィールドワークに際し，ご支援とご教示を賜った横田・大市地区と下横田・古市地区の皆様，並びに奥出雲町教育委員会に心より御礼申し上げる。また筆者が取り組む鳥取大学地域参加型研究プロジェクト「山陰に伝わる『一式飾り』の価値の探究と継承」に対し，ご支援頂いた鳥取大学地域価値創造機構に感謝申し上げる。

注

1　山陰の「一式飾り」と西日本各地の「造り物」「作り物」「飾り物」については，拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（1）－鳥取県南部町法勝寺地区を事例として－」『地域学論集』第 17 巻第 2 号，鳥取大学地域学部，2020 年，拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（2）－島根県出雲市平田町を事例として－」『地域学論集』第 17 巻第 3 号，同，2021 年，拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（3）－島根県出雲市斐

川町直江地区を事例としてー」『地域学論集』第 18 巻第２号，同，2021 年，拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（４）ー島根県雲南市掛合町を事例としてー」『地域学論集』第 19 巻第２号，同，2022 年，並びに以下の研究調査報告書を参照されたい。『「一式飾り」調査報告Ⅰ　若者の視点から見た「一式飾り」』鳥取大学地域学部高橋健司研究室，2014 年，『「一式飾り」調査報告Ⅱ　地域教育を通した「一式飾り」の継承』同，2015 年，『「一式飾り」調査報告Ⅲ「見立て遊び」の伝統の継承』同，2016 年，『「一式飾り」調査報告Ⅳ「一式飾り」の価値の探究と継承』同，2017 年，『「一式飾り」調査報告Ⅴ「一式飾り」に見る伝統の持続性』同，2018 年，『「一式飾り」調査報告Ⅵ「一式飾り」に見る「見立て」の創造性』同，2019 年，『「一式飾り」調査報告Ⅶ「一式飾り」に見る「風流」の伝統』同，2020 年，『「一式飾り」調査報告Ⅷ　コロナ下における「一式飾り」』同，2021 年，『「一式飾り」調査報告Ⅸ　続・コロナ下における「一式飾り」』同，2022 年，『「一式飾り」調査報告Ⅹ　「一式飾り」の復興に向けた取り組み』同，2023 年。

2　足立誠宏「発刊にあたって」島根県横田町文化協会編集・発行『第 30 回横田町文化芸術祭開催記念　横田歴史文化写真帖―文化の薫り高き横田町　歴史写真を尋ねて―』2004 年。

3　島根県横田町文化協会編集・発行，前掲書，34 頁。なお，文中の「嗜好を凝らした」とあるのは「趣向を凝らした」の誤植と推測する。

4　戦後，平田から指導者を招いて復活した「掛合一式飾り」については，前掲の拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（４）ー島根県雲南市掛合町を事例としてー」を参照されたい。なお，平田一式飾り保存会の記録には，大市の「一式飾り」に関するものが見当たらないが，当時は「平田一式飾り」の中興の祖として知られる千把雲陽氏が各地へ出向いて活発に作品を飾っており，千把氏が大市を訪ねて指導したのではないかと推測する。

5　島根県横田町文化協会編集・発行，前掲書，35 頁。

6　古市の上町（常会）の住民によれば，かつては上町でも算盤一式の作品を飾っていたとのことである。

7　古市の仲町（常会）の住民によれば，1982 年に島根県で「くにびき国体」が開催された際，ホッケー会場となった近隣の施設に「一式飾り」の作品を飾ったのを契機として，それまで８月に開催していた古市愛宕祭りを，１カ月早い７月に開催するようになったとのことである。

8　審査員によれば，前年の 2018 年まで作品審査には各常会の小当屋のほかに，女性代表と子ども代表も参加していたとのことである。

9　佐藤恵理『新典社研究叢書 139 歌舞伎・俄研究』新典社，2002 年，605・596 頁。

10　佐藤恵理，前掲書，605 頁。

11　佐藤恵理「『歌舞伎・俄（にわか）研究』概要」早稲田大学審査学位論文（博士）の要旨 2761－４，1998 年３月 20 日，９頁。

12　『造物趣向種』は 1787（天明７）年に初めて出版され，1837（天保８）年と 1860（安政７）年に続編が出版された。また『造物趣向種』は明治時代に再版されている。

13　鳥取県南部町法勝寺地区に残る『造物趣向種』は明治時代に再版されたもので，それを法勝寺では平成時代まで使用していた。「法勝寺一式飾り」については，前掲の拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（１）ー鳥取県南部町法勝寺地区を事例としてー」を参照されたい。また『造物趣向種』は，福井県あわら市金津地区の「本陣飾り物」の制作に用いられたほか，大分県別府市浜脇地区の「風流見立細工」の制作にも用いられた。このように『造物趣向種』は山陰のみならず全国に普及し，それを手本として作品が各地で制作され，「造り物」の文化が定着したと考えられる。

14　小松和彦「総説　芸術と娯楽の民俗」小松和彦ほか編『講座　日本の民俗学８　芸術と娯楽の民俗』雄山閣，1999 年，６頁。

15　俵木悟「Ⅰ華麗なる祭り」古屋信平・俵木悟ほか編『日本の民俗９　祭りの快楽』吉川弘文館，2009 年，69－72 頁。

16　クロード・レヴィ＝ストロース『野生の思考』大橋保夫訳，みすず書房，1976 年，22－27 頁。

17　鷲田清一「芸術の有効性」『日本海新聞』2019 年４月 26 日。

18　小長谷英代「『ヴァナキュラー』―民族学の超領域的視点」日本民俗学会『日本民俗学』285 号，2016 年，１頁。

19　現代民俗学会「第 43 回現代民俗学会研究会　ヴァナキュラー文化研究の輪郭線　野生の文化を考える，野生の学問を考える」2018 年９月 16 日。

20　菅豊「科学研究費助成事業　研究成果報告書　基盤研究（B）『野の芸術』論―ヴァナキュラー概念を用いた民俗学的アート研究視座の構築」2022 年５月 31 日。

21　加藤幸治　『民俗学　ヴァナキュラー編―人と出会い，問いを立てる』武蔵野美術大学出版局，2021 年，190 頁。

22　大月ヒロ子ほか『クリエイティブリユース―廃材と循環するモノ・コト・ヒト』millegraph，2013 年，17－18 頁。